
恋せずにいられない - - ころによせて

あくた咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋せずにいられない - ころよによせて

【Nコード】

N6538Y

【作者名】

あくた咲希

【あらすじ】

日本産の吸血鬼、石見佐久也は現在男子高校生をやっている。そこへ、教育実習にきた笹倉みい子。彼女は佐久也の好みのストライクゾーンど真ん中だったのだが、吸血するには条件があつて……？

(連載全10回)

十七歳以下の女性が望ましい。なお、処女か否かは問わない。できれば、美しいほうがいい。

我が糧は人間の血。でも 現代は吸血鬼には少々、生きにくい時代。

第一話 はじまりは教育実習

十七歳以下の女性が望ましい。これはドクターにも忠告されたこと。MAXステータス（記憶力や運動能力などの最高値）を維持するため、吸血対象を十七歳以下に限る。性別についての指示はなかったが断固として女がいい。なお、処女か否かは問わない。そういう経験のあるなしで味はそう変わらない。かえってコクが出るのだと美血家は言うとか言わないとか。そして、できれば美しいほうがいい。欲は言わないが首筋は美しくあつてほしい。

俺、ヴァンパイア。日本生まれの吸血鬼。

我が糧は人間の血。人間の食べ物は胃腸が受けつけてくれない。だから、自分好みの美人の生き血が唯一のグルメである。この現代においてサラサラ血の美人に遭遇するということが、それは希有だ。二つの条件をクリアしている上に、必要最低条件である十七歳以下の女性となると、もう。吸血鬼は基本的に不死だが時の過ぎる速さは人間と同じ、一日に三度は腹がへる。背に腹はかえられないから、グルメとはほど遠い吸血生活を送ってきたゼコンチクシヨウ。

そんな俺とは対照的に、けして妥協しないヤツもいた。俺とは年齢が近く、百年あたり前までつるんでいた悪友の太一である。それが 去年の夏のことだ。炎天下の運動会の開会式で倒れ、人間の

病院に入院した。点滴は吸血鬼にも有効らしいが、それだけでは間に合わず先月とうとう骨と皮だけになって死んだ。老夫婦の養子として人間社会にもぐりこんでいたそいつは人間と同じように火葬され、人間の墓地の一角に眠っている。看取ってやれなかったが葬式に参列した俺に、養父は一冊の文庫を差し出した。

悪友の死は、吸血鬼社会の役所が発行する公報グローバル版にもでかでかと掲載された。『One young vampire died of hunger! (若き吸血鬼、飢餓で死亡!)』
以来、公報の枠外には「贅沢は敵」だとか「モツタイナイ」だとか、そんなキャッチコピーが躍るようになった。

今日も俺は校舎の屋上で、昼休みを一人で過ごしていた。梅雨の晴れ間の日差しはやけにばかばかだ。俺、何回目の高校生だろう。学生をやりはじめたのは明治の頃だったか、悪友とともに下宿を借りて日夜、人間の若者と議論を交わしてみたりしたものだ。あの頃とはうってかわってフランクになった学生生活も、これはこれでいいものである。共学が一般的になって女の子とも出会いやすくなったし。ただ、ここにきて男子高に入学してしまうなんて……。いくらなんでも男の血を吸う気にはなれないっての。転校という手も考えたが、人間社会で戸籍を持たない身としてはそれも難しい。そこんとこをうまくやってくれる吸血鬼社会の役人が活動するのは春先だけで、現在は休業中。しばらくは偶然の出会いに賭けるしかなかった。吸血行為に及ぶには、多少は親しくなってからでないと無理だから。今この時代、うかつに吸血しようとするとは即犯罪者だ。婦女暴行。住居不法侵入。捕まった仲間の噂もちらほら聞く。
俺はため息をついて日陰に移動した。ネクタイを緩めてコンクリに寝ころぶ。なんの変哲もないスニーカーを脱ぎ捨てた足を適当に組むと、グレーの膝小僧が視界に入る。数日ぶんの空腹を紛らわすために、ひと眠りすることにする。

「こらーっ！ こんなとこで何してるっ？」

頭上からの声に、反射的に跳び起きた。

「とつくに授業はじまつてるんだからねっ」

女の声。教師陣までむさ苦しい男揃いな男子高に、女の声！ 逆光に目を細めながら凝視すると、スーツに身を包んだ小柄な女が仁王立ちをしているではないか。セミロングの髪が屋上の風になびいている。薄ピンクの指先で、俺の曲がったネクタイをキュツと締め

る。
「勝村先生が問題児って言ったの本当だったんだ。全校朝礼、出てなかったでしょ。教育実習生がくることも知らなかったでしょ」

「……は。教育実習生？」

というからには、大学生だろう。現役で進学したとしても二十一歳か、二十二歳のはず。それがどう見てもこの女は高校生だ。身長が一八〇超ある俺より小さいのは当然としても、幼い。

「ほんとに大学生？」

ぼろりと疑問を口にする、女は、丸っこい顔にカーツと血をのぼらせた。

（あ、旨そう）
いや違う、

（あ、やばい）

と身を引いたが、時すでに遅く。

「何よ！ 童顔なのは生まれつきよ！ みんな初対面でひどいよ！」
などと吠えかかってきた。うん、童顔ってだけの問題じゃないと思う。めっちゃめっちゃ声が高いし、反応が単純。だから俺は、小さな女の子にするように頭をくしゃっと撫でてしまった。

「ごめんごめん、悪かったな、あ」

教育実習生はくりくりした目にみるみるうちに涙をためて、でも必死に唇を噛んで、我慢して。ぷるぷるときゃしゃな全身を震わせた。こりゃ実習期間中マスコット決定だな。

（ついでに……まじ旨そう）

腹がキュンと鳴った。しかし十七歳以下でないとダメだ。難儀な

もので、吸血鬼は年寄りの血を吸うと老化してしまう。これは何も吸血鬼に限ったことではなく、いつだかどこだかの実験でも、若マウスの血を注入された老マウスは回復力が増し肝機能が活性化し、逆は衰えたという。そんなメカニズムで、健やかに生きてゆくには人間の若い血が必要なのである。

吸血鬼の子どもは、生まれて三年ぐらいで乳離れをする。俺だつてもものごころつく頃にはすでに・・狩りをしていた。体の成長が一段落する頃、つい、年上の女が魅力的に見えちまつたりして。いつかの戦乱の世だったかな、合戦の跡地をうろついていた俺を拾ってくれた女の血を吸ったとき、ひどい二日酔いをしたのだ。ああ俺これが限界だ、吸血するなら若い子にしよう、と。その頃ちようどドクターからのお達しもあった。さて

「俺、教室に戻るけど。センサーはどうする。そんなんじゃ戻れないっしょ？」

ぼろぼろ涙をこぼしはじめた実習生を見おろして、俺は頭をかい

た。

「あー。だから、泣きやんで。な？」

抱き寄せて、背中をさすってやる。実習生は俺にしがみつき、わあんと声を上げて泣きはじめた。こんなんで先生をやっつけていけるのか？……心配だ。

「二時半か。六限は国語だったな。センサーって国語教師志望？」

「ぐすつ、英語。勝村先生が指導してくれてるんだ」

「なんだ、担任の使いつ走りか」

おおかた国語のヒステリック禿げジジイからヘルプを求められ、担任の勝村のやつ、自分じゃ面倒だから実習生を仕向けたってことだな。

「今はまだいいが、本当の先生になったら生徒の前でこんな、泣いたりとかしちやダメよ？」

「冗談めかして言うと、実習生はキョトンと顔を上げて、まじまじと俺の顔を見つめた。まるっこい子どももみたいな目。もしかすると

血液の年齢も若いかもしれん。

わきあがつてくる吸血欲求を必死に抑えている前で、センサーは目をしばたいてから頷いた。

「石見くんで、意外にいいコね」

スーツの袖から覗いたブラウスで涙を拭い、にこつと笑う。教育実習ってことは、これから二週間この学校で過ごすわけか。大丈夫なのか？ どちらかというとチャライ高校だぞ。聞けば母校の抽選にもれたとかで、兄貴がかつて世話になったというこの高校に受け入れてもらったらしい。兄貴は、やめとけと止めたらしいけど。(チャラ高出身者にしては正しいぞ兄貴。)

「家から通える範囲でないと困るし、教員免許ほしいから。都会に出て、一人暮らしするの」

俺を連れ戻すという任務を忘れた様子で夢を語るセンサーは、どう見繕つても世間知らずのお嬢ちゃんだった。現実をすつとばして夢ばっか見てる。こんなんで二週間、耐えられるのか。

(……なんとかフォローしてやるか)

幸い俺は問題児で、ケンカも強いと評判だ。このコの授業で騒ぐ奴がいたらシメてやるか。

「じゃ。センサー、職員室、ちゃんと戻れる？ 化粧、直してから行けよ」

「うん。あつ、そんなにひどい？」

「マスカラがちょっと落ちた程度かな」

センサーは慌てて、胸ポケットから折りたたみミラーを出して確認した。

「あー、やだ。せつかくうまく出来たのに」
地団駄らしきものを踏んでから、階段につづくドアを開ける。

「先生、先に戻るから。石見くんも早く教室戻るんだよー」
手を振ると、鉄筋の階段を降りていった。

「甘い。詰めが甘い」

ヤンキー座りをしたところで思い直した。

彼女のために、ジジイのわめく教室に戻ることになりますか、っと。

食事、もとい吸血をしない日が一週間ほどつづいていた。つい先日まで付き合っていたコンビニバイトの子が十八歳になって一週間誕生日がきたからつてすぐに血が変わるとも思えなかったが、念のために別れた。彼女は顔も血も及第点な、従順なフリーターだった。別れを告げたときも少し目をみはっただけですぐ頷いてくれた。ああいうコは都合がいいんだ。こんな言い草は失礼極まりないが、日陰で暮らす俺たちにとって正体を明かさず如何に言い訳ができるかは、かなり重要だ。このへんのが俺は苦手なので、詮索好きや粘着質な女は困るのだ。

体は充分に動かせるが、さすがに空腹だった。腹が鳴るたび「餓死」の二文字が頭をかすめる。電車のドアに寄りかかり食料をさがすが、目ぼしい女は見当たらない。いた、と思ったら、あの教育実習生だった。こんな時間の電車に乗っているとは、寝坊でもしたか？

（却下却下。あーでも吸いてえ。二日酔い覚悟でやるか……しかし……）

生徒と先生の恋愛はご法度。実習生といえど不祥事が発覚したら、彼女の夢は潰えるかもしれない。屋上の一件から、俺、何気に彼女をサポートしてきたのだ。彼女、度胸はあるらしく授業はちゃんとされていて、でも童顔をからかわれると泣きそうになるもんだから、そのたびに俺はちよっかいを出した生徒を体育倉庫の裏に呼び出して。そんなだから、よけいに腹が空く。

車両を変えようと踏み出したそのとき、揺れはじめた車内にイヤライシ声がムツと充満した。

「みーちゃん、今日オレ予習してきたから指名してよ」

「みーちゃん、わかんないところあるから放課後に個人授業してくれない？」

「みーちゃん、きょうのお弁当のおかずは？」

みーちゃんみーちゃんみーちゃん、と！

俺はツカツカツカとそのチャラくてむっさい人だかりに歩み寄ると、一人の襟首をつかんで、振り向いたところを睨みつけてやった。とたんに竦みあがる生徒A。

「ひいつ、おまえは一年D組の石見佐久也さくやっ」

「……。みーちゃんなどと、馴れ馴れしく呼ぶな」

「はっ、はひーッ！」

男どもは悲鳴をあげて別の車両に散っていった。ついでにほかの乗客もいなくなってしまう。おずおずと俺を見上げ、センサーがいった。

「別に、あたし、構わないんだよ？」

「構わないわけあるかよ。そんな顔して」

あーあー、また顔赤くして。涙ためて。

「がんばって化粧したんだろ。我慢だ我慢」

センサーはすーはーすーはーと呼吸をして、にこっと笑って小首を傾げた。

「ありがとうね、石見くん」

実習期間の折り返し地点にも到達していないのに、俺、センサーとずいぶん親しくなっていた。常に彼女のことを気にしていなくてはならないので、睡眠タイムだった英語の授業をサボれず、そのぶん夜の町を徘徊する時間が減った。吸血鬼らしからぬ早寝早起き、お笑いだ。

結局、校門まで一緒に登校した。センサーは手を振ると、職員室のある棟へ走ってゆく。

(さて、午後の英語の時間まで何をするかな)

いつもの屋上を仰いだものの、

(……ジジイの授業、ちゃんと出てやるか)

サボタージュすると、彼女が使いつ走り屋上にやってくるハメになる。貴重な時間を潰させるのも悪いし、俺はおとなしく教室に

向かった。

嫌がらせのごとく国語が一限目。俺、だてに長く生きていないので成績は悪くない。居眠りせずきちんと受け答えをしていれば、ジジイも白い髭を撫でるばかりでヒスを出さずにすむ。

穏やかなジジイの声に促されて、椅子の右に立ち教科書の小説を読み上げた。夏目漱石の『こゝろ』だ。俺には鬼門ともいえるシロモノである。なぜなら悪友が遣したのが、この本だったから。教科書には一部分しか掲載されておらず、ページ下のあらすじによると一人の女に二人の男が恋をし、片方は自殺し、もう片方も苦悩の末に自殺する物語。ミもフタもない。

授業終了のチャイムが鳴り、屋上へ向かった。あいにくの雨で、出入り口のドアに背中をびったりつけ、コンクリートの庇にギリギリ収まって低い空を見上げる。

センサー、もとい笹倉みい子のことを思い浮かべると、決まって空腹を強く感じるようになっていた。いつそのこと吸血しちゃえば、とも思う。二日酔いをする上に老化が進むといっても、餓死するよりはよっぽどマシだ。都合のいいことにみい子は俺に気を許しているフシがある。生徒だけでなく先生陣にもからかわれるらしいこの学校で、味方は俺だけだと思ってるのだろう。少し甘い言葉と態度でもって誘惑すれば、存外かたんに落とせるんじゃないか。そうなったらあとは人目につかないところでコトに及べばいいだけだ。唇を這わすなら、やっぱり首筋がいいな。あいつの首、色白で見るからに美味しそうで。毎日手作り弁当で、健康に気を遣ってるようだからきつとサラサラ血だろうし。

昔は、一週間の断血程度でここまで切羽詰まることはなかった。でも、同族の死を知ってからというもの、空腹に一種の強迫観念をおぼえるようになった。死を意識すると、得体の知れない感情が俺をとりまく。吸血してえ。でも、そういう関係が露呈して彼女の夢を壊すわけにはいかない。でも死にたくない。吸血してえ。堂々めぐり。

二限開始を告げるチャイムが鳴った。俺は階段を二段ほど降り、腰を降ろした。空腹すぎて睡眠どころではない。話し相手でもいれればいいが、と思っっていると、国語のジジイが階段の下を通り過ぎていった。この先の図書室にでも用があるのだろう。俺はこっそりとあとを追った。

自分の授業には出席していたもんだから、ジジイは鷹揚に俺を招き入れた。定年間近という以上に老けて窪んだ目を動かし、棚の上を物色している。俺はにわかに関切心を発揮し、さがし物を手伝ってやることにした。埃をかぶった分厚い本を取ってやると、ジジイは律儀に礼をいって受け取った。しかし、枯れ木のごとき腕では本の重みに耐えられなかつたらしく、倒れこむようにして傍らの机にドサリと置く。そしてそのままページを繰り、調べ物をはじめた。

邪魔にならないように足音も息もひそめ、本棚を見てまわった。

漱石だって当然ある。薄っぺらい文庫を片手にジジイを振り返ると、ちょうどこちらに視線をよこしたところだった。

「それ、漱石のдар。何も全集を持ち出さなくても、これで事足りるんじゃないか」

「ああ、こっちの解説を読みたかつたんじゃ。物忘れがひどくてのなるほどと思いつつ、こっちの文庫のほうは俺が借りることにした。うちにもあるんだけど、出版社が別だから解説とやらも違っているのだろう。ちっぽけなカウンターで鉛筆を拝借し、貸出日と名前を記入する。カードは、クラスごとに分かれたプラスチックのケースに入れた。

「ほう、全文を読むか。結構、結構」

ジジイは肩を揺らして笑った。……もう、何十回と読んでるんだけどな。

「ときに、石見よ」

文庫を尻のポケットにねじ込んでみると、ジジイが急に神妙な顔になって言った。

「某実習生と、仲がよろしいようじゃが？」

「なつなな仲っていうか、……その。彼女、見かけとか性格とかあ
あだから、ほつとけないっていうか……つつがなく実習を終えられ
るようにと、見守ってやりたいなー、とか……」

このテの言い訳って機転が利かないな、俺。ジジイは俺をじーっ
と俺を見ている。

「ほうほう。石見は優しいんじゃないー」

「へっ?」

「笹倉くんの兄さんは俺の教え子でな。妹思いのいい兄さんじゃ、
このたびも『妹をよろしく』と頼みにきおったわい。彼女の教科が
国語でないのが残念じゃわ」

「ああ、はあ……」

「石見がついとるなら、誰もちよっかいを出せんじゃろっし安心じ
やな」

ジジイは俺の背中をぐいぐい押しながら、図書室から出た。愉快
そうに笑い、施錠する。

「しかし、おまえも手は出せんぞ。将史まじはそれこそ、妹思いの極致
にいる男じゃて」

そんなことを言い置いて、ジジイは別棟へつづく渡り廊下に姿を
消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6538y/>

恋せずにはられない - - ころによせて

2011年11月28日08時56分発行